

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520005

研究課題名(和文) 表象媒体の哲学的研究—画像の像性と媒体性の分析を中心に—

研究課題名(英文) Philosophical Studies on Mediums of Representations: Imageness and Mediality of Pictures

研究代表者

小熊 正久 (OGUMA, Masahisa)

山形大学・人文学部・教授

研究者番号：30133911

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000 円

研究成果の概要(和文)： 小熊は、フッサールの遺稿を参照しつつ、画像表象における像物体、像客体、像主題という三契機に関連して、知覚的な指定を中断する「中立性変様」が不可欠であることと、その変様の本質的諸特徴ならびに他の意識作用と連関を明らかにした。田口は、「類似」の現象と像意識の受動的側面を明らかにした。清塚は絵画における見られた内容と描かれた内容の関連を考察した。山田は、アスペクト転換の考察を手がかりに、知覚と概念の関連を考察した。小熊は、感覚と意味という知覚の二契機が時間意識の媒介によって成立することを明らかにした。研究成果を書籍『画像と知覚の哲学—現象学と分析哲学からの接近』として出版した。

研究成果の概要(英文)：1. According to the Husserl seeing images has three factors. 1) image-thing (upon which an image appears), 2) image-object (image which appears) and 3) image-sujet (the depicted object itself). And the latter two have the relation of resemblance. But by this alone the phenomenon of image is not yet realized. For that, it is necessary for us to interrupt positing the being of the image-object (neutral modification). OGUMA studied this modification. TAGUCHI studied the resemblance and the relation of resemblance and the passivity of image-experience. 2. KIYOZUKA analysed the relation between what is seen and what is represented. 3. YAMADA argued the relationship between perception and concept in reference to Wittgenstein's thought about "Aspect Switching". 4. OGUMA also studied the relationship between perception and meaning. According to Husserl, two factors of perception(sensation and meaning) come to being through the medium of Inner Time-consciousness.

研究分野：哲学、現象学

キーワード：表象媒体 画像の虚構性 知覚 現象学 分析哲学

1. 研究開始当初の背景

代表者は以前、「画像」をコミュニケーションの「メディア（媒体）」の一種と捉え、その特質の把握を目的として、「画像」についての共同研究を行った。そこでは、絵画、写真、映画などの諸メディアの特質が、現象学、分析美学、技術論、倫理学、メディア社会論などの観点から考察された。（科学研究：基盤研究(C)，平成19年度～21年度、「メディアの哲学の構築—画像の役割の検討を中心として—」、課題番号19520007、代表者・小熊）。だがその後、本研究応募者たちは、画像がコミュニケーション手段などとして機能するためにはまずもって「表象媒体」でなければならないという理由から、「表象媒体」としての画像の本性を解明する必要があると考えてきた。というのもそのことによって、はじめに、画像がコミュニケーションやそのほかの機能（たとえば記録・再現的機能、芸術的・美的機能）を果たす仕組みも最終的に明らかになると考えられたからである。

2. 研究の目的

(1) 画像という表象媒体における像性と媒体性を解明するということが目的であったが、小熊と田口は、以上の試みにあたって、まず、フッサールの講義と遺稿を編集した *Phantasie, Bildbewusstsein, Erinnerung* 1898-1925 (Husserliana Band 23) (想像・像意識・想起) の正確な読解が必要であると考えた。同書には、「知覚・想像・画像表象の対比」、「像に対する諸態度の複合」といった、画像表象の基本的諸問題をめぐる現象学的分析が含まれており、「像性」と「媒体性」の分析にとってきわめて有用な内容が提供されているからである。

(2) 分析哲学・美学を専門とする清塚によれば、絵画や彫刻に代表される造形作品を記号作用の担い手として見た場合に、その基本的な特徴としてあげられてきたのが、作品と、そこに表された対象との間の「類似関係」で

ある。そこで、清塚はこの類似関係をめぐる諸議論を参照しながら、画像（作品）の像性と媒体性に取り組むことを目的とした。分析哲学的な手法で研究を進めている山田は、ウィトゲンシュタインの「像理論」や「アスペクト知覚」の考察を参考に、画像や知覚における表象と言語的表象を対比させながら、像の像性と媒体性の問題に取り組むことを目標とした。

3. 研究の方法

(1) 上で述べたように現象学的方法と分析哲学的方法によりながら、また、関連文献を参照しながら、画像の像性と媒体性の解明を目指した。その際、共通の主題を別の手法で扱うという事情があるので、とくに方法の面に注意しつつ討論を行った。

(2) この問題に関心を有し、現象学や分析哲学的手法にも通じている研究者を招き、発表や討論を行いながら研究を進めた。そこには、現象学関係では、フッサールの像意識を手がけている研究者、メルロ＝ポンティの絵画論の解釈に取り組んでいる研究者、また、サルトルの芸術論とともに分析美学にも詳しい研究者、分析哲学における知覚研究に関心を寄せている研究者などが含まれる。最初の3年度は年に2回の研究会を開催した。最終年度は、各自研究をまとめながら、相互に連絡をとって、総括としての書物の編集を行った。

(3) 関連の諸学会やシンポジウムにおける発表や講演を通して、ほかの研究者の意見をも聴取し、討論も行った。

4. 研究成果

本研究の研究成果は、代表者、分担者、研究会への参加者の論考からなる『画像と知覚の哲学—現象学と分析哲学からの接近』（小熊、清塚編、東信堂、2015年刊）にまとめられた。同書は12名による論考（13本）を収め、「画像とは何か」「絵画と芸術作品について」

「知覚について」という三部に分かれる。以下、代表者、分担者の執筆論考名を記すとともに、二つの観点からの総括を付す。

第1章「画像表象と中立性変様—フッサーにそくして—」…小熊

第2章「受動的経験としての像経験—フッサーから出発して—」…田口

第4章「絵の中に見えるもの—見えるものと描かれたもの—」…清塚

第11章「アスペクトの転換において変化するもの—ウィトゲンシュタインの二つのアスペクトの分析を通じて—」…山田

第13章「時間意識を介しての感覚と意味—フッサーの知覚論の動向—」…小熊

(1)画像の虚構性：画像を見ることそのものと画像内容の虚構性

小熊と田口は現象学的手法で、画像研究をおこなった。いずれも画像表象の三種類の契機（像物体、像客体、像主題）の関連を顧慮しながら、小熊は、フッサーの遺稿を参照しつつ、画像表象において、物的基盤とそこに見えているものの現実性の措定を中止する「中立性変様」の役割が不可欠であることを明確化した。また、想像作用と画像の意識がどのように関係しているかを、フッサーの中期に到るまでの思想に従って考察した。田口は、フッサーの考察を超えて、像経験がどのように知覚によって媒介されている「受動的経験」であるかということを中心に、知覚作用との比較検討も行いながら、画像表象の構造を考察した。

清塚は、絵画における「見える内容」と「描写内容」との分離および関連という主題について、ホプキンスとブラウンの分析を検討しつつ考察を行った。清塚は、両者の関係は一樣ではなく、一方の、見える内容を描写内容を特徴づけることに貢献するものと捉える見方と、他方の、見える内容をそのまま描写内容として受け入れるような捉え方の中間

に、実際の個々の見方が位置づけられると考えた。小熊の考察が画像の非現実性の考察を含むのに対して、清塚の考察は、絵の非現実的な見え方が、絵の描写内容との関係でどう意味づけられるのか、という問題であり、描き方（スタイル）や解釈の問題にも関連する考察である。

(2)知覚と意味：知覚と概念の、カテゴリー的、時間的関連

山田は、ウィトゲンシュタインのアスペクト転換の考察を手がかりに知覚と概念乃至意味との関連を考察した。この転換には、視覚的体制化に関わる非概念的仕方と概念的仕方がある。後者では、絵と或るカテゴリーの対象との類似性を「見る」ことによって対象が再認される。

小熊は、知覚作用における「感覚」の在り方と「赤い家」といった「意味づけ」の関連を時間意識の観点から考察し、知覚は未来予持・現在化・過去把持という時間的契機を含み、「感覚」も「意味づけ」もこれらの契機を通して生成するということを、フッサーの分析によりつつ明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計13件)

小熊 正久、フッサー時間論の生成、思索、査読有、第47号、2014、69-92

田口 茂、ホワイトヘッド哲学における思弁と理性、理想、査読無、第693号、2014、43-54

田口 茂、田辺元——媒介の哲学第二章 国家論の射程と「種の論理」の展開、思想、査読無、第1089号、2014、103-124

清塚 邦彦、フィクションの言語行為をめぐって：G・カリーの分析への批判的論評、山形大学紀要（人文科学）、査読有、18(2)、2014、1-18

清塚 邦彦、ネルソン・グッドマンの贋作論：『芸術の言語』第3章の分析、山形大

学紀要（人文科学）、査読有、第 18 巻第 1 号、2014、1-38

田口 茂、悪の媒介性と直観の方法的機能—シェリングと田辺の「間」、シェリング年報、査読無、21 号、2013、15-24

小熊 正久、中立性変様とその諸形態、山形大学大学院社会文化システム研究科紀要、査読有、10 号、2013、49-68

山田 圭一、蝶番命題の否定が位置づけられる場所—前期・中期・最晩期のウィトゲンシュタインの思考を通じて—、千葉大学人文社会科学研究、査読無、27 号、2013、1-11

田口 茂、Reduction to Evidence as a Liberation of Thinking: Husserl's Idea of Phenomenology and the Origin of Phenomenological Reduction、査読無、1、2013、1-11

田口 茂、田辺元——媒介の哲学第一章「種の論理」の形成と「悪」の媒介性、思想、査読無、1067、2013、6-26

清塚 邦彦、実在しない事柄をよろこび、かなしむこと、思索、査読無、45(1)、2012、85-108

山田 圭一、物語りえず語りうる過去—大森過去論と野家物語り論との比較を通じて—、思索、査読無、45(2)、2012、433-453

小熊 正久、ブルーメンベルク著『コペルニクスの宇宙の生成』最終章の含意、山形大学大学院社会文化システム研究科紀要、査読有、第 9 号 2、2012、69-82

〔学会発表〕（計 11 件）

山田 圭一、What is Wittgenstein's View of Knowledge?, Workshop on Knowledge in Interaction、2016.3.21、政策大学院大学

清塚 邦彦、絵の知覚と描写内容、日本科学哲学学会ワークショップ「心の哲学と美学の接点」（招待講演）、2015.11.21、首都大学東京

田口 茂、内は外であり、外は内である—フッサール・西田・田辺、現象学の異境的展開オープニングシンポジウム講演、2015.7.4、明治大学

田口 茂、Unentrinnbare Erfahrung. Evidenz und Wirklichkeit bei Husserl und Levinas., Das Philosophische Colloquium（招待講演）、

2014.6.16、ドイツ：Bergische Universitaet Wuppertal

山田 圭一、私が世界について語りうるためには何が必要か、日本哲学会、2014.6.19、北海道大学

田口 茂、Evidence as Medium: A Phenomenological Interpretation of Certainty, 11th Annual Conference of the Nordic Society for Phenomenology、2013.4.20、デンマーク・コペンハーゲン大学

田口 茂、媒介としての明証—フッサール現象学と田辺元を手引きとして、西洋哲学と日本思想の対話（フランス大学協会主催）、2013.12.14、同志社大学

山田 圭一、アスペクトの変化とはどのような変化なのか—ウィトゲンシュタインの哲学と知覚の哲学の交差点—、日本現象学会、2013.11.10、南山大学

小熊 正久、フッサールの想像論、東北哲学会 第 62 回大会、2012.10.21、東北大学

田口 茂、悪の直観と媒介性—シェリングと田辺の「間」、日本シェリング協会第 21 回大会、2012.7.8、明治大学

山田圭一、蝶番命題の否定が意味するもの、人文科学研究所哲学第 2 回ワークショップ「ウィトゲンシュタインの哲学をめぐって」、2012.10.20、日本大学

〔図書〕（計 6 件）

清塚 邦彦、有斐閣、現代哲学キーワード（野家啓一編）第 4 章「言語」、2016、67-87

小熊 正久（編）、清塚邦彦（編）、田口 茂、山田圭一、東信堂、画像と知覚の哲学—現象学と分析哲学からの接近、2015、262

小熊 正久、東北大学出版局、自然観の変遷と人間の運命（座小田豊編）第 4 章「人間にとっての地球の意味—フッサールとブルーメンベルクによる考察—」、2015、83-103

田口 茂、筑摩書房、現象学という思考—自明的なもの の知へ、2014、270 頁

清塚 邦彦、大隅書店、これが応用哲学だ！（共著、戸田山和久・美濃正・出口康夫編）、2012、187-197

清塚 邦彦、ひつじ意味論講座 6 意味とコンテキスト（共著、澤田治美編）、2012、

6 . 研究組織

(1)研究代表者

小熊 正久 (OGUMA, Masahisa)
山形大学・人文学部・教授
研究者番号： 3 0 1 3 3 9 1 1

(2)研究分担者

清塚 邦彦 (KIYOZUKA, Kunihiro)
山形大学・人文学部・教授
研究者番号： 4 0 2 9 2 3 9 6

田口 茂 (TAGUCHI, Shigeru)
北海道大学・文学研究科・准教授
研究者番号： 5 0 2 8 7 9 5 0

山田 圭一 (YAMADA, Keiichi)
千葉大学・人文社会科学研究科 (系)・准教授
研究者番号： 3 0 5 3 5 8 2 8